

桃太郎に思う

飯長 村井 莖 由

岡山駅で汽車やバスを待つときに、桃太郎像がよく目にとまる。そのたびに桃太郎は何才ぐらいに作られているのだろうかと思ったりする。昔話に出てくる年齢を想定してそれにふさわしい姿にしなければならぬということもなかろうから、昭和は昭和の年齢でさしつかえあるまい。

明治以前に著作された桃太郎説話に関するものは二十種に余る。だがその中で燕石雜志（馬琴著）、骨董集（京伝著）、そして嬉遊笑覧（喜多村信節著）の三つが聖典として童話世界に君臨している。その一つ骨董集には、「おのれ二十四、五年前童話の出所をたづねて、かきとどめたるもの、童話考と名づけて一冊あり、いまだ考の足らざる所あれば、年久しく秘め置きぬ」とあり、二十四、五年前といえば寛政二、三年のころになる。社会は大きく揺れ動いている時である。大衆読物としての黄表紙や洒落本が巾をきかしたところで幕府の政策は行きづまり気味、新題材、新趣向を求めていた時代である。したがって京伝も「桃太郎発端話説」として、舌切雀によって桃太郎の出生前をえがき、鬼ヶ島を征伐して宝物を奪うことは、彼の出生前に老父母から鬼が奪った宝物を取り返すという道徳的にみて妥当なやり方であることを強調する。つまり正当な宝物奪還説として登場させる。

馬琴は馬琴でまた一家言をもっている。彼はしょっぱなから「桃の実の中より児の生れし由は所見なし」と断定して、「古事記」の伊弉那岐命が桃子に言ったことは、「竹取物語」のかぐや姫の出生などから、そしてきび団子について「孔子家語」、「拾芥抄」から桃子団子ときめつける。さらには鬼ヶ島鬼門説をひきつけて日本の南方の島とし、さるとりいぬ申・西・戌を擬人化して三従者とし「保元物語」の為朝鬼ヶ島に渡る事にその根拠を求める。博学にして傍証の確かさ、まさに驚くべきである。嬉遊笑覧もまた出典豊富であ

る。「平家物語」「狂言記」「保元物語」等々数えあげればきりが無い。そして「これらのことすでに醒齋（京伝のこと）が骨董集にいへり」と結んでいる。

実際、桃太郎の説話はいろんな解釈を人々にさせる。それだけ抱擁力のある話である。成人相手に説明しようとするれば、「私情をはぶいて足ることを知り、身の分限に応じて安んずるにしかず」という処世訓、やゝ朱子学的な合理性が鼻をつくが、婦女童幼を相手にしては、天明調狂歌の極盛に便乗して「わが心の鬼に勝つ」というのが男の勇氣であると、こゝでは心学太郎として人々の心を衝く。

だから、それぞれの話にふさわしいように桃太郎の浮世絵ができあがる。これは元禄以前から出版されたいいが、年代がくだるにつれて桃太郎の顔は若やいでくる。天明八年正月に出版された三光堂著では廿四、五才で出てくるが、天保ごろには十四、五才に描かれ、明治初期は四、五才にかかっている。桃太郎は「さかさに年をとる」のであろう、二十年に一才くらい若くなる勘定である。加えて桃太郎の容貌はその時代時代の好男子の標本であるから、さて駅前像は何才ぐらいの想定なのか、腕を拱ぬいて私はじっと見つめる。

ところで当博物館も創設以来三年の月日を経ようとし、関係の方々のご尽力ご指導により隆昌の一途をたどっている。まことに有難いことである。しかし、わたしたちは安住し満足しているのではない。本県の歴史博物館として成長発展していくために、どういう構想がより現代に生きる姿勢であるか、関係職員の模索、怠らない所以である。どの時代にしてもその時代として成熟し開花した一時期をもっている。しかも長くゆるやかな変化の中に。今日という時代——それは思想も、風俗も、道義も、文学も、性急であり、移り気であり、時代の傾斜していく過渡期の常として

下克上のたゞ中にいる。かつては桃太郎も二十年に一才ずつ若くなっていって、今日ならば一年に一才、いやもうマイナスの年齢になっているかも知れない。しかし、そうあせってはなるまい。本県の歴史を跡づけても、古代から中世に移る時、中世から近世に移る時、そこには例外なく大きい変動があったことゝ想像されよう。そうした時に吉

備文化の高度な英知が、どのように伝統として、県民に生きる力を与えてきたか。あたかも、いつのころからか、桃太郎説話が本県に導入され、定着したその素朴な庶民性の姿のように。それは初々しい若さのようにはかり知れないものがある。これを物によってどう表現するかこれが私たちの課題ともいえる。

花菱の創始者

磯崎眠亀

錦莞菱の発明

「岡山県の繭業と磯崎眠亀」と題して昨年11月より本年3月まで民俗部門の展覧を行い、眠亀の遺業を再認識することができた。

関係資料の出陳について、磯崎竜子郎氏に格別の御協力をいただいたことを、先づ厚く御礼を申しあげたい。

磯崎眠亀は天保5年(1834)倉敷市茶屋町(当時の備中郡宇都郡帯江新田村)に生まれた。家業は小倉織物をやっていたが、父の死後江戸へ出て、領主戸川家へ勤めたものの2年で武士に見切りをつけ、文久2年故郷へ立帰った。

帰路大阪で英国から輸入された紡績糸を入手、初めて西洋綿糸を小倉織に使用することに成功した。

折しも明治維新を迎え、世の中は大きく揺れ動いていた。

岡山は古くから畳表の生産地として知られ、全国に販路を持っていたが、維新と共に景気が悪化していた。眠亀はこれを打開する途として、衣服用織物から敷物の製造に転進して、独創的な新製品を考え出していた。生来、研究癖の強かった眠亀は、輸入糸を用いた小倉織機の改良、1丈3尺巾の広織織機の開発等考案を続けていたが、明治9年ごろから両面緞通の発明その他新しい敷物織機の考案にとりかかった。

これから眠亀の苦しみが始まる。

この頃のように、大正初年の国定教科書には「寝食を忘れ」とか、「狂奔苦悶、赤貧洗うが如し」、などという言葉で表現されているが、ともかく、そのために産を失い、家業を忘れ、狂人扱いをうけた。

しかし、それに屈せず、研究の結果、梯形の箆を用いて広い所で組み、それをせばめて地締めをする広組縮織という技法を案出した。時に明治11年5月であった。

続いて紋様挿繭機を発明、ようやく精巧にして格調高い



磯崎眠亀 (1834—1908)

明治30年緑綬褒賞を下賜された記念に写したもの

織込花菱をつくり出すことに成功した。

眠亀はこれに「錦莞菱」と名付けた。

輸出と特許条例

一難去ってまた一難、眠亀の苦しみはまだ続く。

販路の開拓であった。国内では珍品、優品と賞めてはくられても誰も買おうとしなかった。意を決し、神戸の輸出商へ持込み、明治14年最初に英国商社より契約を得た。以来ドイツ・アメリカと販路は開け、明治35年には輸出額677万円にのぼる重要輸出品にまでのしあがっていた。

一方、明治14,5年頃には、まだこのような発明に対する保護法は制定されていず、機密の漏えいを防ぐことに苦心したが、将来性のある産業の保護にのり出した時の県令高崎五六は、一時、製造を監獄署に移すとともに、製品の錦莞菱にそえて「物品専売の儀に付伺」の陳情を農商務省に対して敢行した。この陳情書と眠亀の作品を見て「これこそ

日本の羅紗」(当時ラシャはヨーロッパの重要輸出品であった)と感嘆した農商務省大書記官前田正名は、心から協力を約し、たまたま草案審議中の専売特許条例が時期を早めて発布されることになった。

明治18年7月1日、条例は施行されたので、施行当日出願、受付番号1番で出願が受理され、織機は23号、錦菟薙は24号で登録された。

以来、監獄署で製造したり、従業員に唾を使ったり、工場の窓をおおったりする心配はなくなり、岡山市天瀬に進出、磯崎製薙所として織機650台余、従業員1200人を数える大企業にまで成長した。

錦 菟 薙 の こ と

花薙の3尺巾に360本立のものは、たて糸に綿糸30番手7本よりを、200本立のものは20番手6本よりを用い、60本立のものには麻糸を用いてある。何れもたて糸には小麦粉糊及び柿渋を使っている。イグサは厳選されたものを、大中小に区別し、細いものを上製に、太いものを下等品に、中の太さのものを中等製品に用いる。使用に際しては木槌で打って柔軟にし、染色はドイツ製かフランス製のアニリン染料を用いてある。眠亀の生まれた茶屋町は三高藪という良質なイグサの産地として名高い三高地方(早高・帯高・高須賀)であり、すぐれた原料を得易かった。

また、イグサを染色することは、それまで泥に浸したり草木の汁で染めるため、原料がもろく耐久性がなかったが、眠亀はあらゆる材料を試用した結果、ついに塩基性染

料による植物断片繊維の煮沸染色法を案出した。

そのうえ、文様は格調高い傑作ぞろいであり、現代でも充分通用する。むしろ現代に失われつつあるものを持つてきえいる。

良質な材料であるためか、製作されてから100年を経た今でもなお使用に耐えることは驚嘆のほかはない。

3畳敷1枚を織りあげるのに、延19人分を要し工賃が6円かかっている(明治15年)。これを1畳15円くらいで売買されていたから、米1石が7円80銭したところとしてはかなり高価なものではあった。

幕末から明治という動乱期にあつて、文字通り寝食を忘れ、自己の道をひたすらに歩み続け、困難をきり開いて、花薙の創始、外貨獲得、特許法発布など、かすかすの輝かしい業績を残したことは、明治の殖産興業史において特筆すべきことであるが、岡山県にとって特産品としての畳表・花薙が衰退のきざしのあるいま、眠亀の人間性について教えられるところはないだろうか。

参 考 文 献

磯崎竜子郎：「花薙より見たる明治殖産興業政策」

高梁川23号 昭和44.7

磯崎竜子郎：「磯崎眠亀」伝その時代と人々

高梁川28号 昭47.10

(森田平三郎)

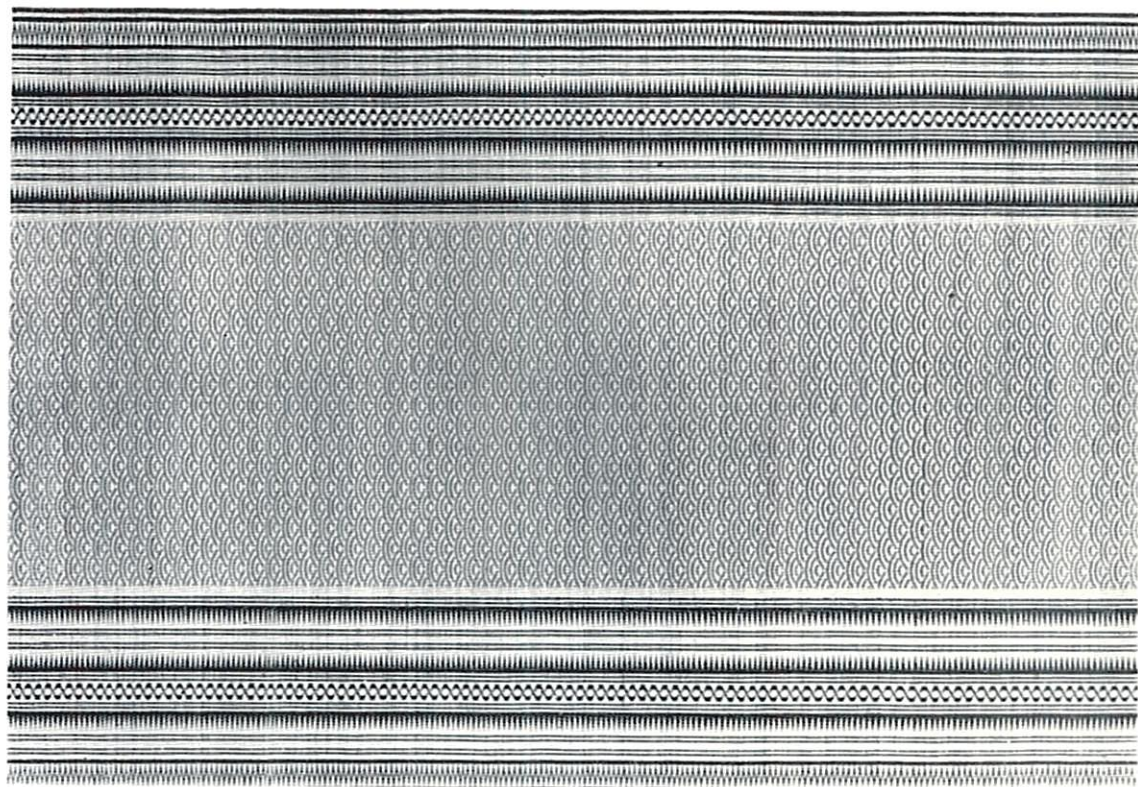
眠 亀 旧 宅

倉敷市茶屋町に現存している。壁駈の張付け瓦に青海波を用い、門柱に弓をかたどったものをつけ、2階へ上がるのに階段を用いず斜路の廊下を昇るようになっているなど、各所に奇抜な発想が見られ、眠亀の風格がしのばれる。主屋は明治8年42才の年祝に先祖追慕の古材を用いて建てたものであるが、町屋としても立派なものである。この家の2階作業場で花薙が発明された。敷地建物は眠亀没後産業標本館として茶屋町に寄付され、一時公民館として使用された。しかし、現状は邸内の外廓が変更され、主屋のみが空家同然のようになって淋しく残っている。保存されるべきである。

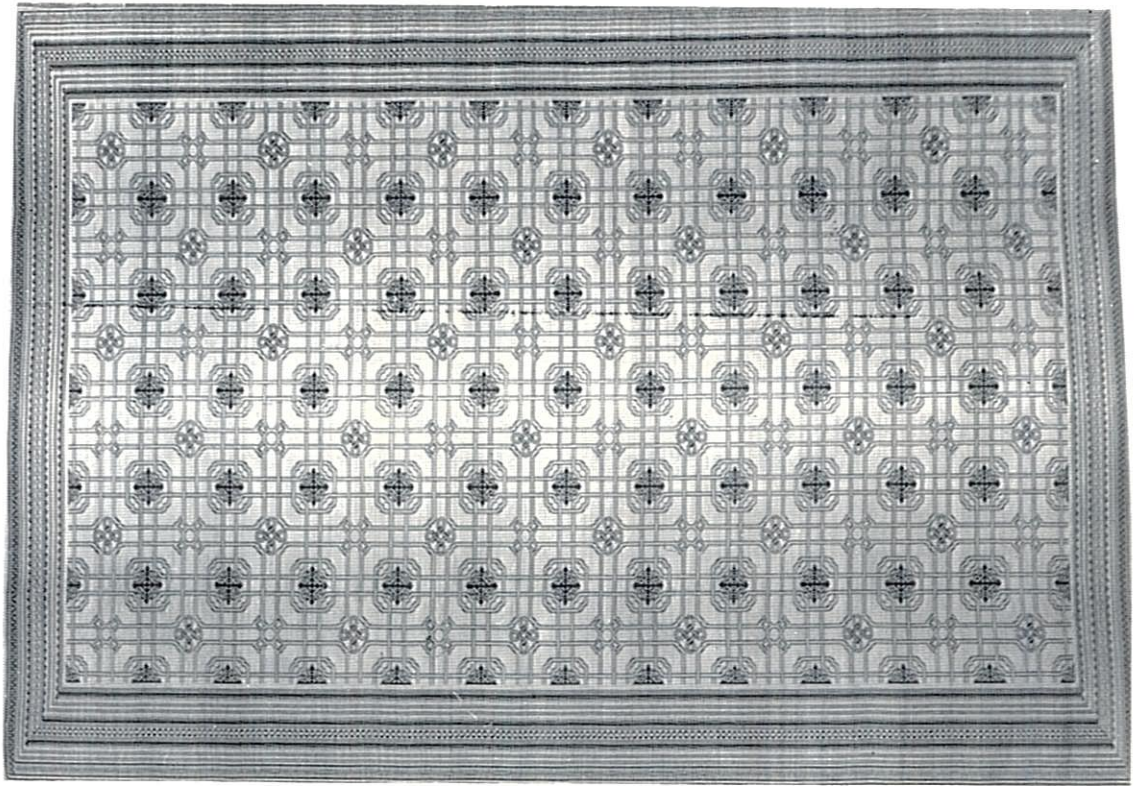




獅子狩文錦模様錦莞蕙 明治18年製作 法隆寺献納御物のササン錦の模様を花蕙に応用したもの。英国に輸出した最初の頃の製品。1畳敷



青海波模様錦莞蕙 (部分) 明治20年製作 輪廓の文様は明治6年ウィーン万国博出品のセイロン島の土人の手芸品からヒントを得、中に青海波を織りこんである。色彩、意匠ともに思わずウーンと唸りたくなるようなもの。1畳敷



角継文錦莞 蕙 明治23年製作 輪郭の模様はセイロン土人手芸よりとったもの。現代に通じる優品。第3回内国観業博覧会に出陳，2等有功賞を受けた。3畳敷



牡丹唐獅子模様錦莞 蕙 明治28年製作 眠危の代表作ともいべきもの。絢爛豪華というにふさわしい力作。第4回内国観業博覧会に出陳，名誉銀牌賞を受けた。3畳敷

珍品考古学

各種の開発が企てられるにつれて、遺跡・遺物の新発見が連日のように報道される。新聞紙上しばしば見られるように、「わが国でもっとも古い弥生墳墓」「最も大きい鏡の発見」「はじめて木組み残存の住居址を検出」などと伝えるセンセーショナルな記事は、遺跡・遺物に対し、一時的に、世間の注目を集める。その反面、紙面に反映しない幾多の遺跡が暗々裡のうちに消滅している事実も数えきれない。いずれにせよ、こうした事態が考古学に対する関心を高めている傾向は、いなめないであろう。

ところで、博物館においても、ことさらに珍品を展示しようとする方法がみられる。たしかに、それは見る側に強烈な印象を瞬間的に与える効果があるが、ともすれば歴史的な流れの中で、その物の理解を果しえない欠陥を伴うのではあるまいか。たとえば、青銅器にみまがうばかりの須恵器の装飾壺が一個だけ陳列された場合、観客は、その力強い成形技術、精選された粘土やすばらしい焼成に、ひいては壺の姿の美しさに魅了されるに違いない。

しかし、須恵器が祭祀用の器として多く用いられ、また、杯、高杯などは日常生活に欠かせない器として使用された一面を、みおとすおそれがあるように思われる。

いうまでもなく、須恵器の用いられた後期古墳時代から奈良・平安時代までには、それぞれの社会的発展の諸段階に応じて、おのずから器形の変化やセット関係の推移がみ

られ、そして、常に時代の要請に照応した古窯址がある。そこには、夥しい細片や焼けひずみの未製品が層をなして存在し、いびつな製品または半製品は、優品とよばれる品よりはるかに多い。にもかかわらず、これらが博物館に陳列



装飾付子持須恵器 本館蔵

されることはほとんどなかったといつてよいであろう。だから、優品といわれる装飾壺だけに固着しては、正しい歴史を語る素材の提供にはなりえない。そこで、限られた陳列スペースの中で展示物をどう選定し、その物につかず、その物を通して、その背景をどう説明しきるかが大きな課題とならう。実はその辺に博物館員の苦悩がある。

同時代の遺物の組み合わせ、遺物と遺跡との関連性などを十分配慮し、正しい歴史認識の可能な展示を実現させることがことのほか大切な気がしてならない。

(葛原克人)

おしらせ

- 昭和48年前期常設展が9月26日で終了です。
- 貴重な文化財をお貸しくださしました多くの方々、遠路見学においでいただきました皆様にあつくお礼申し上げます。
- 秋季特別展「岡山県の中世——古文書よりみた——」の準備のため9月27日より10月10日まで閉館いたします。
- 第5回学術講演会

10月13日(土) 1:30~4:30

本館講堂

岡山大学名誉教授 藤井駿氏「岡山県の中世」

広島大学教授 河合正治氏「中世の瀬戸内海」

聴講無料

昭和48年度における博物館入館者数調

昭和48年4月1日より9月30日まで

個 人		団 体		合 計
大人	小人	大人	小人	
191,896	16,559	208,455	70,862	6,984
				77,846
286,301				

博物館だより No.5

発行日 昭和48年8月14日

発行者 岡山県立博物館

館長 村井董直

岡山市後楽園1-5

TEL(岡山)72-1148